火の山地区観光施設再編整備基本構想【概要版】

下関市　令和３年２月

Ⅰ. 現状と課題の把握

1. 基本情報

（1）下関市の概況

本市は、本州の最西端、山口県西部に位置し、JR、関門自動車道、関門トンネルなどの広域交通網を有し、関門海峡は響灘と周防灘、日本海と瀬戸内海を結ぶ海上交通の要衝となっている。

かつては、関門海峡を挟み九州と対峙し、朝鮮半島や中国大陸と近接する地理的特性から、海上・陸上の要衝として栄え、文化の伝来や交流が行われてきた。また、平安時代には「壇ノ浦の戦い」、江戸時代には「巌流島の決闘」、幕末から明治時代における「明治維新との関連」などが展開され、市内には数多くの史跡や文化財を有している。

（2）火の山地区の概況

火の山の標高は 268.2m あり、古くは狼煙台が山頂付近に設置されていたことから「火の山」の名称がつけられたと言われている。

1890 年（明治 23 年）には山頂に砲台が置かれ「下関要塞」としての利用が続き、1948 年（昭和 23 年）まで一般人の入山は規制されていた。

戦後、火の山公園は昭和 23 年に都市計画公園に決定され、公園整備が進んだ。昭和 31 年 5 月に「瀬戸内海国立公園（関門海峡地域：第 2 種特別地域）」指定、昭和 33 年 4 月に「火の山ロープウェイ」開業、昭和 48 年 3 月「火の山展望台」開業など観光施設整備が進み、賑わいを見せていた。

火の山地区の関連施設 位置図：地理院地図より作成

昭和 48 年度には展望台来館者が 100 万人近くに達したが、観光客の減少、施設老朽化などが進み、平成 15 年 3 月には「火の山ロープウェイ」が運休、平成 28 年には「火の山展望台」が閉鎖し、展望台は平成 29 年に解体された。

平成 17 年 10 月から「火の山ロープウェイ」は実証実験という位置付けで営業を再開し、現在では 3 月から 11 月までの期間限定（火曜日と水曜日は運休）で運行している。また、山頂付近には立体駐車場があり、山頂には子供広場や遊歩道が整備され、市民や観光客の散策や憩いの場として活用が見られる。

（3）火の山ロープウェイ

火の山ロープウェイは、昭和 33 年 4 月に運行開始。最盛期の昭和 30 年代には年間約 50 万人が利用した。しかし、火の山パークウェイ開通や観光客減少により、平成 15 年 3 月 31 日で運休となった。その後、平成 17 年 10 月に実証実験として運行を再開。平成 19 年からは 3 月から 11 月の期間限定で営業再開を果たしている。

［令和 2 年度(2020 年度)運行概要］

運行期間	令和 2 年(2020 年)3 月 19 日 ～令和 2 年(2020 年)11 月 19 日
営業時間	午前 10 時～午後 5 時（00 分、20 分、40 分）
運休日	毎週火曜日と水曜日
利用料金	大人片道 310 円（往復 520 円）、 小人片道 150 円（往復 260 円）
諸元	全長：438.96m　走行方式：3 線交走式 運転時分：4 分　運転速度：秒速 3.0m 駅数：2 駅（起終点駅を含む）　高低差：165m 最急勾配：29° 05″　支柱基数：なし 搬器：1978 年大阪車両工業製造 2 台（定員 31 名）

火の山ロープウェイ

（4）火の山公園

火の山公園は、都市公園（広域公園）に位置付けられる 122.5ha で、瀬戸内海国立公園にも含まれる。山頂からは瀬戸内海と日本海が一望でき、公園からの夜景は日本夜景遺産にも認定された。園内には、チューリップ等の名所があり観光客や市民が訪れる。山頂まではロープウェイ、パークウェイ（通行無料）があり、歩いて登ることも可能。

火の山公園山頂

［火の山公園の概要］

駐車場	山頂立体駐車場：普通車用 276 台、大型バス用 8 台 火の山ロープウェイ壇の浦駅（山麓）：普通車用 36 台、大型バス用 4 台
トイレ	山頂（身障者用あり）、山麓
遊具	複合遊具（滑り台、ローラー滑り台、ターザンロープ、ネットクライムなど）
その他	火の山パークウェイ、トルコチューリップ園
アクセス	◇JR下関駅よりバスで ・長府駅・宇部中央・小月営業所方面行き乗車 13 分（みもすそ川下車～徒歩 8 分山麓着～火の山ロープウェイ利用又は遊歩道徒歩 30 分で山頂着） ・国民宿舎行き乗車 15 分　「火の山ロープウェイバス停」下車すぐ ◇下関インターチェンジから車で 10 分

（5）火ノ山砲台跡

火の山の山頂は、平安時代から狼煙場が築かれ、現在は、明治 21 年から築造された火ノ山砲台跡を見ることができる。火ノ山砲台は当時の重要な軍事拠点として 4 箇所の砲台が築かれ、一部には当時の面影が残る。平成 28 年には土木学会推奨土木遺産に認定。

第 4 砲台跡

第 4 砲台跡のカマド

（6）火の山公園での開催イベント

［火の山公園の桜とツツジ］

関門地区有数の桜やツツジの名所。満開の時期には多くの観光客で賑わう。

［火の山公園トルコチューリップ園（オルハン・スヨルジュ記念園）］

火の山公園山麓斜面をトルコチューリップ園として整備。

［関門海峡花火大会］

山口県下関市と福岡県北九州市門司区の関門海峡の両岸で実施され、毎年 8 月 13 日に開催。

出典：下関市 HP

火の山公園

Ⅱ. 火の山地区観光施設再編整備の方向性

1. コンセプト

火の山地区が抱える主な課題

【火の山地区の概況から】
良好な眺望や豊かな自然環境、歴史的な遺産など豊富な資源を有するが、近年は春の花見シーズンを除き集客は低下している。今後は、火の山地区が持つ豊富な資源を生かした新たな魅力づくり、市民や観光客にとって一年を通して訪れる誘客対策の展開が求められる。

【火の山地区を含めた下関市の観光動向から】
本市は県内では有数の観光地として多くの観光客を受け入れているが、近年は訪日外国人や国内旅行客の更なる受入拡大が求められており、市内の主要観光地の回遊性向上や滞在消費額の拡大に向けた全市的かつ広域的な観光戦略の構築が求められる。さらに関門海峡地域の観光ネットワークの拠点機能としての役割も必要とされている。

【訪日外国人の動向から】
訪日外国人や国内バスツアーの立ち寄り傾向から、唐戸市場や赤間神宮など、近隣観光地へは多くの観光客が訪れている。そのため、唐戸周辺から火の山地区へ誘客を図るため、眺望や自然を活かした体験型観光など、本市になかった新たな魅力づくりが求められる。

【関連計画での位置付けから】
火の山地区は県および市の各種計画において、豊かな自然、魅力的な観光・レクリエーション、関門海峡を望む眺望や特徴的な景観を生かした整備が求められる。
国道 9 号から唐戸方面への徒歩・公共交通でのアクセス改善も求められる。

【Webアンケート調査結果から】
火の山地区は下関市民や山口県民には知られているが、県外の方には知られていない。また、山頂からの眺望を楽しむことが主目的となっているが、それ以外での楽しみがなく、食事施設や屋内展望施設を望む声が多い。また、地区を構成する4つのエリアをつなぐ交通利便性の充実が重要であり、火の山地区全体の魅力向上と移動手段の再構築が求められる。

火の山地区観光施設再編整備に向けた基本的な視点

1. 火の山地区に存在する特有の地域資源を生かした場の整備を行う
火の山地区にある特別な地域資源を活用し、年間を通じて、変化するさまざまな火の山地区の表情をとらえ、今以上に魅力的な場所となるように整備を行う。

①眺望のよい特別な景観
火の山には、勢いのある潮の流れや狭い海峡を往来する多くの船舶など、関門海峡の迫力ある景観や、ロープウェイ上駅からの関門海峡～下関市街～日本海まで見渡せる壮大な眺望、美しくライトアップされた関門橋や下関市街の夜景がある。火の山地区固有の景観を活かし、年間を通じて楽しめる場を整備し、リピーターを集める。

②国立公園のもつ豊かな自然
火の山公園は、下関市街からほど近い位置にあり、瀬戸内海国立公園として指定されている。その立地を活かし、豊かな自然空間を活用することで、気軽に楽しく、四季折々の自然を堪能できる場を整備する。

③歴史
火ノ山砲台跡や壇ノ浦古戦場跡等を訪れるだけでなく、情報発信施設や歴史遺構の活用によって、歴史を後世に伝える。

④ロープウェイやパークウェイ
老朽化が進むロープウェイや山頂への車でのアクセス経路となるパークウェイは、火の山地区の高低差を活かした眺望を楽しめる移動空間として、実現性ある整備手法、既存施設の利活用を図り、持続可能な施設へリニューアルを行う。

2. 火の山ブランドの確立～ソフト・ハード整備～
・火の山の魅力を最大限に活かした施設整備を行うことで、市内主要観光地との差別化を図り、火の山らしい魅力と楽しみ方を提供し、観光客の増加を期待する。
・ハード整備に加えて、官民協働でブランディングを展開し、火の山の認知向上に努め、観光集客によるにぎわい創出、市民からも火の山への再評価を得る。

3. 地域圏から広域圏までのネットワーク化の整備
・特有の地域資源を活かした場から場へ、魅力的に動線をつなぐことで、回遊性を向上させ、滞在消費額への拡大につなげる。
・下関市内や唐戸地区とは異なる火の山地区としての魅力を打ち出し、主要観光地を結ぶ広域ネットワークの整備を行う。

4. 地元住民の憩いの場へ
・火の山地区がもつ特有の地域資源を市民に開放することで、魅力や誇りを再発見し、地元住民お気に入りの場所を見つけ、繰り返し訪れる場所とする。
・住民主導で地域資源を活用し、保全する仕組みを整備し、火の山の歴史や誇りを継承していく。

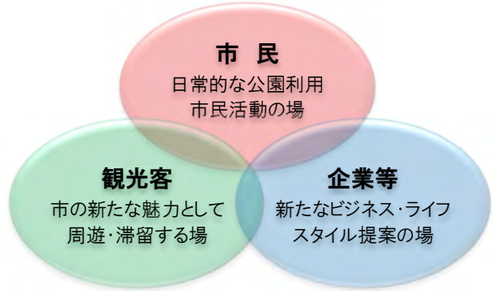
5. 長期的に安定した事業運営に向けて、段階的に整備を行う
・官民協働を視野に入れた整備手法の展開を行い、持続可能な事業とする。
・短期、中期、長期で段階的に整備を行うとともに、社会実験などを同時に行うことで、新たな魅力発見へとつなげる。

火の山地区観光施設再編整備　コンセプト

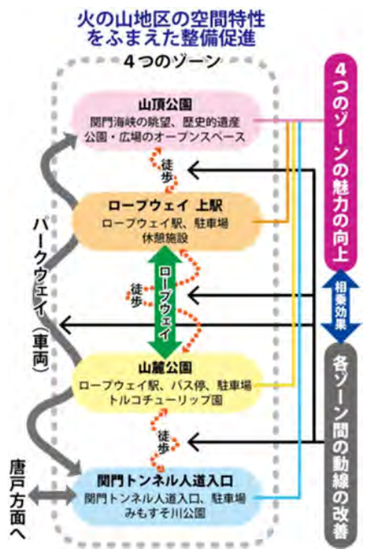
再生誕　火の山
～多彩な魅力を発信・体験する場～

“火の山地区”の再生を通じて目指すもの･･･

ターゲット
日常生活での市民利用から非日常的な観光利用、企業等による新たな利用など、全ての人に親しまれ、活用される場としての再編整備を目指します。

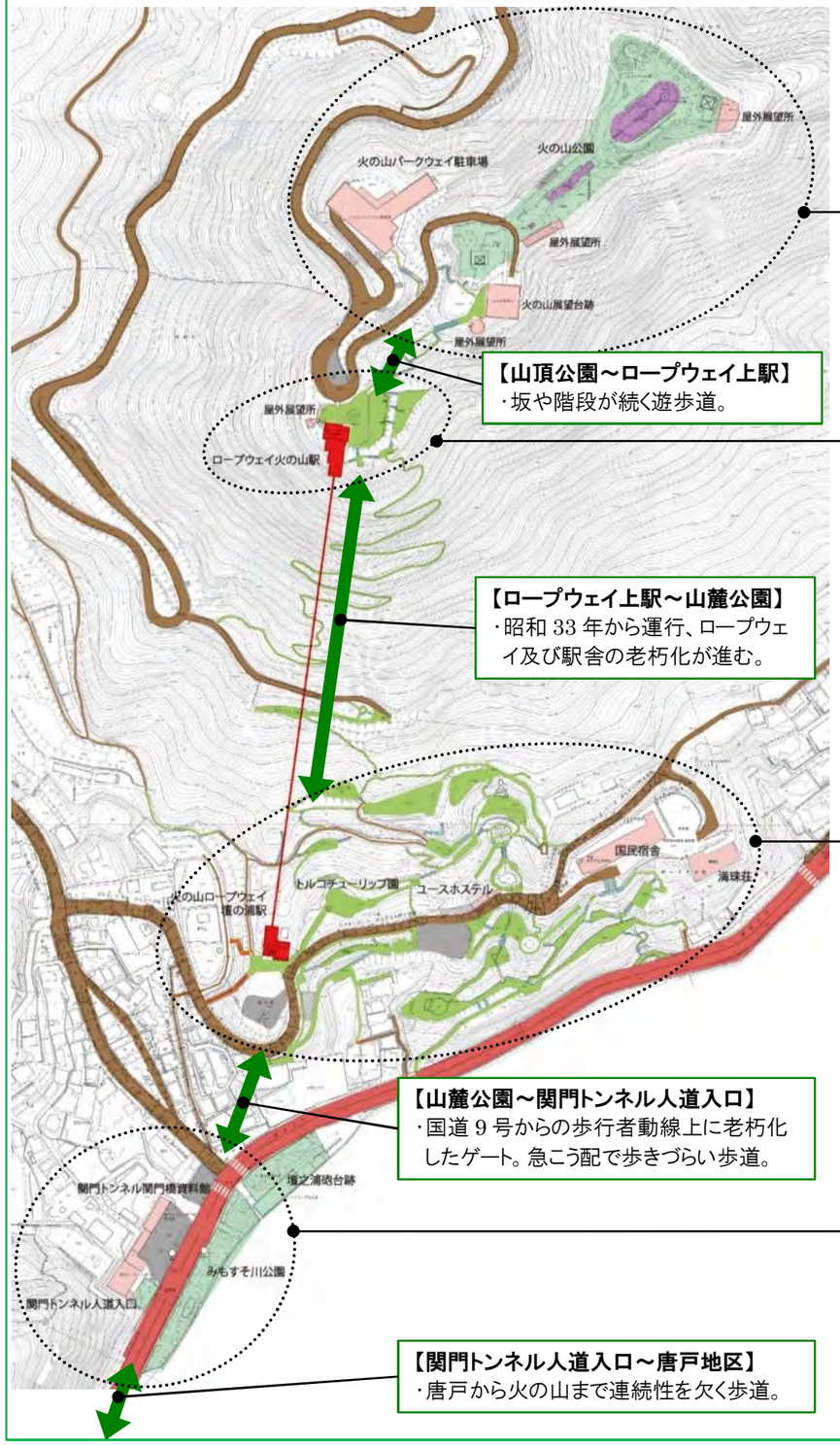


魅力づくり
火の山地区の多彩な資源のポテンシャルを活かし、＋αの魅力づくり、朝から夜や年間を通じた多様な楽しみ方を発信・体験できる場を目指します。また、火の山地区全体はデザインの統一性を確保しつつ、4つのゾーンに分類し、各ゾーンの魅力向上とともに、ゾーン間の移動も楽しめる空間づくりを目指します。



火の山地区観光施設再編整備「再生誕　火の山　～多彩な魅力を発信・体験する場～」4つのゾーン別コンセプト

火の山地区を構成する4つのゾーン



【山頂公園～ロープウェイ上駅】
・坂や階段が続く遊歩道。

【ロープウェイ上駅～山麓公園】
・昭和 33 年から運行、ロープウェイ及び駅舎の老朽化が進む。

【山麓公園～関門トンネル人道入口】
・国道 9 号からの歩行者動線上に老朽化したゲート。急こう配で歩きづらい歩道。

【関門トンネル人道入口～唐戸地区】
・唐戸から火の山まで連続性を欠く歩道。

山頂公園

〇公園・広場
・関門海峡の眺望、豊かな自然、遊具などで構成されるオープンエリア
〇火ノ山砲台跡
・案内板のみで周知されておらず、未活用の貴重な遺構
〇旧展望台
・展望台解体後、山頂の目的となる施設の喪失

ロープウェイ上駅

〇ロープウェイ上駅・眺望
・施設の老朽化が進み、眺望は最も良いが、快適に過ごす展望スペースがない
〇ロープウェイ
・ロープウェイが季節運行かつ昼間運行のみのため、夜景を楽しむ時間帯の山頂へのアクセスが良くない

山麓公園

〇トルコチューリップ園
・春の開花時期などにだけ人が訪れている状況
〇ロープウェイ下駅
・施設の老朽化が進む
〇山麓公園
・公園内の遊歩道や施設が老朽化し、更新が望まれる

関門トンネル人道入口

〇壇之浦砲台跡
・長州砲のレプリカや砲撃音の演出、語り部が活動
〇関門プラザ
・関門トンネルや関門橋の展示はあるが、火の山関連など、観光情報が不十分
〇関門トンネル人道入口
・人道トンネルの積極的な活用は見られない
〇みもすそ川公園
・海峡を行き交う船舶をダイナミックに感じられる

ゾーン別コンセプト

山頂公園

自然や歴史を活かした年中楽しめるイベント空間

・火の山山頂の豊かな自然、四季を感じながら、市民と観光客が一緒になって、楽しみながら活動し、親しみのもてる空間を目指す。
・火ノ山砲台跡を活用し、砲台の地下倉庫等の非日常的な空間で、飲食や音楽を聴いたり、読書をしたりできるイベントを行う。

ロープウェイ上駅

眺望を活かした上品なくつろぎ空間

・瀬戸内海から日本海、下関市内を見渡す、眺望をゆっくりと堪能できる展望施設の整備を行う。
・時間と共に変化する景色を、落着いた空間でゆっくりと過ごせる施設整備、飲食等の提供を行う。
・日本夜景遺産の魅力を活かし、昼間とは異なる夜間空間を演出する。

山麓公園

自然の中でダイナミックに遊ぶ活動の空間

・山麓公園の自然や地形を活かし、大人も子供も一緒になって遊べるアクティビティの整備を行う。
・広範囲な自然を活かし、キャンプや自然体験ができる場、近隣ホテル宿泊者や市民、観光客など、様々な人たちが交流する自然を活かした活動の場を整備する。

関門トンネル人道入口

遊び方を提案する情報提供の空間

・火の山地区の玄関口として、自然や歴史を紹介するだけでなく、四季折々の遊び方を提案する場を整備する。
・壇ノ浦の戦いや馬関戦争など歴史の舞台となった関門海峡の迫力をじっくりと眺める場を整備する。

唐戸・長府地区や門司港地区との連携（公共交通による移動）

ゾーン間の動線

人道口から山頂まで快適な移動とともに楽しさを感じられる移動手段の再構築

【主要動線】
・火の山地区のゲートと言える国道９号沿いの「関門トンネル人道入口」から「火の山山頂」に至る間で、既存のロープウェイ及びパークウェイに代わる移動手段を確保する。
・移動手段の選定にあたっては、効率性や経済性に配慮し、単独のモード、複数のモードの組み合わせで比較し、実現化を検討する。

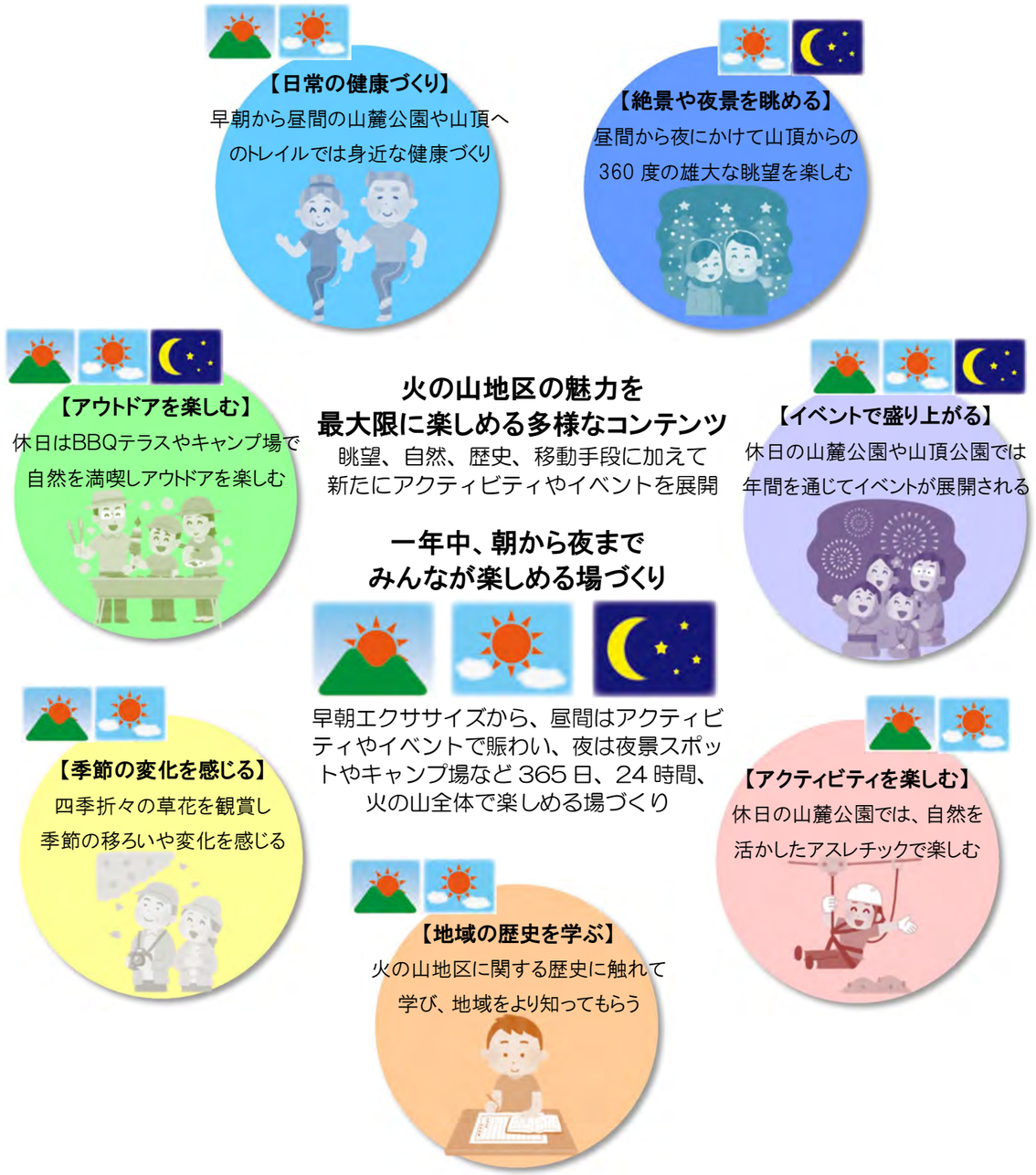
【トレイル動線】
・主に火の山地区の山麓から山頂に至る動線として、既存の登山道のほか、近年利用が高まる自転車の活用などの新たなトレイル利用も視野に導入に向けた検討を進める。

【パークウェイ】
・現在は山頂に至る車両が通行するパークウェイについては、サイクリングやゴーカートなど、レジャーやイベントへの利用転換も視野に、新たな活用方策の検討を進める。

火の山地区における将来の利用シーン

・火の山地区観光施設再編整備コンセプトに基づき、市民や観光客、企業等をターゲットに、火の山地区全体において活用される場づくりを展開する。そして、4つのゾーンではそれぞれの特徴を生かした魅力づくりを行う。

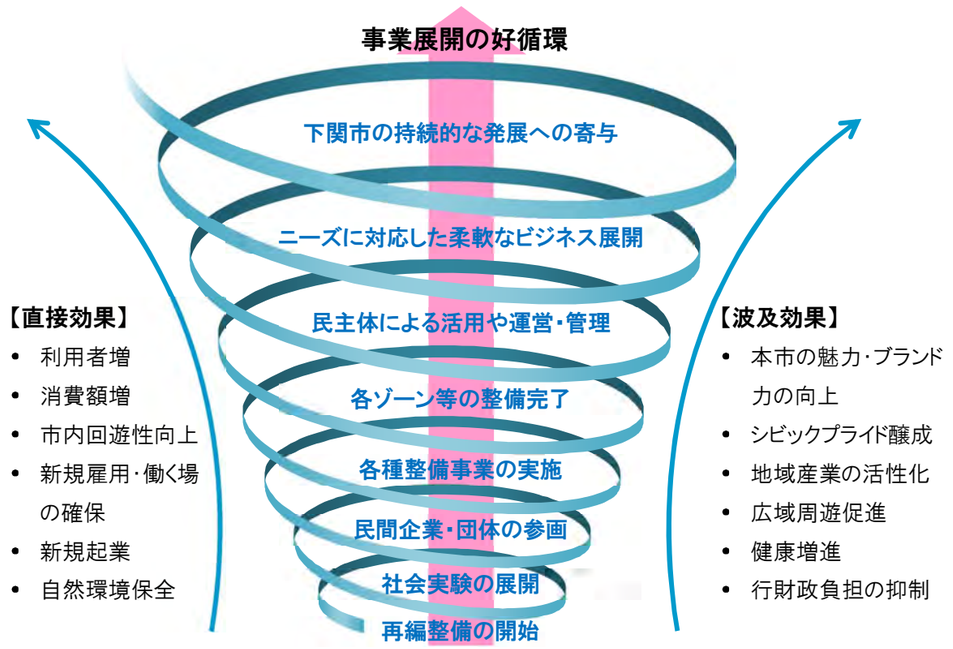
・再編整備後の利用想定シーンとして、市民や観光客が朝から夜の一日中、四季を問わずに年間を通じて、運動やアトラクション、飲食、ビジネス・学習などの多種多様な生活のシーンを豊かにする空間としての活用が図られる場を目指します。



火の山地区観光施設再編整備の事業効果イメージ

・ 火の山地区観光施設再編整備の実現にあたっては、大規模かつ複合的な事業展開となることから、切れ目のない持続的な整備と施策の展開が望まれる。また、市主導だけではなく、民間企業や各種団体とも連携を図った取り組みを展開していくことも望まれる。

・ 今回の整備では、場を整備することが目的ではなく、場の整備とともに、持続可能な取り組みへの好循環を生み出し、下関市の魅力向上に寄与し、地元企業・人材の育成や発展、本市のシビックプライド醸成の一端を担う場として多方面・他分野への波及効果を創出する整備を目指す。



市民

・日常利用の増加
・個々の活動範囲の拡大
・健康増進
・地元への愛着、誇り

観光客

・下関市への記憶、興味
・下関市への来訪によりまちを知る
・再来訪による下関市への愛着
・移住

企業

・新たなビジネスの展開
・収益の増加
・地元を含む新規雇用の取得
・ワークライフバランスの取組み

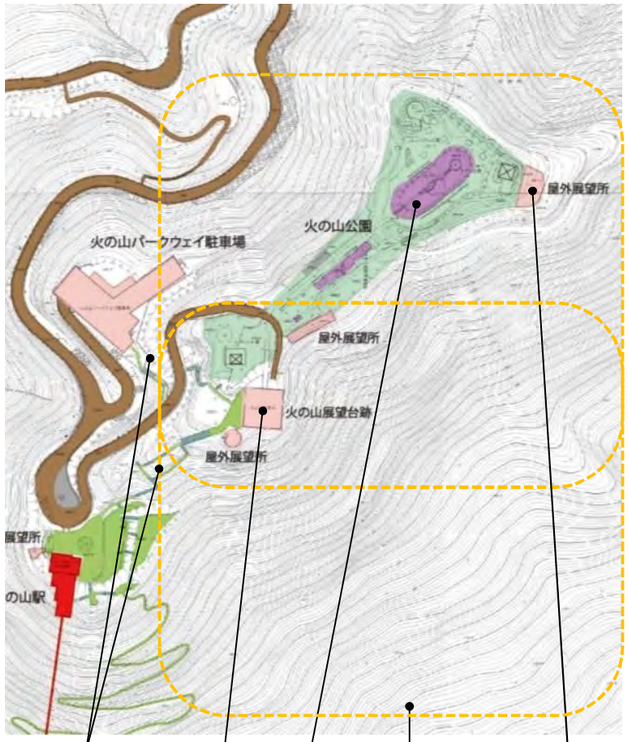
行政

・老朽化施設の更新
・新たな魅力づくり
・市民、来訪者の増加に伴う市内の回遊性向上による街の活性化
・民間主体による事業化
・民間主体に伴う財源負担の減少

2. ゾーン別の再編整備の方向性

（1）山頂公園

現状と課題



歩行者空間
・パークウェイ駐車場やロープウェイ上駅から山頂公園までの歩行者空間は安全性や快適性の向上が必要。

瀬戸内海国立公園
・瀬戸内海国立公園の一部であることが周知されていない。

火ノ山砲台跡
・施設案内板があるだけで、興味のある人が見るに留まっており、周知されておらず、活用もなされていない。

旧展望台
・市民に親しまれた展望台が解体され、山頂の目的となる施設がなくなっている。

屋外展望所
・瀬戸内海国立公園を一望できるが、奥まっており、十分な有効活用がされていない。

整備の方向性

【ゾーンコンセプト】

・ **自然や歴史を活かした年中楽しめるイベント空間**

・ 火の山山頂の豊かな自然、四季を感じながら、市民と観光客が一緒になって、楽しみながら活動し、親しみのもてる空間を目指す。

・ 火ノ山砲台跡を活用し、砲台の地下倉庫等の非日常的な空間で、飲食や音楽を聴いたり、読書をしたりできるイベントを行う。

山頂公園

①日常的な市民活動の場としての活用
・ 山頂空間を市民に開放し、有効活用してもらう。
・ 市民活動の場として日常的に活用を図ることで、火の山地区への愛着を醸成する。

ヨガイベント

自然に囲まれた環境でヨガ

森の図書館

森の中の本棚から自由に読書

森の学校

自然と人との交流から学ぶ

③砲台跡地の活用
・ 現在は放置されている砲台跡を活用することにより、歴史的遺構をより身近に体験できる場とする。
・ 火の山地区の歴史的な背景に触れてもらい、より火の山地区が持つ価値・魅力を知ってもらう。

楽しみながら歴史を感じる

歴史的遺構を活用した施設

②年間を通しての定期的なイベント等を展開する場としての活用
・ 定期的なイベント等のソフト整備や魅力的な「場」としての空間づくりを行い、市民だけでなく観光客をターゲットに継続的に火の山を周知する。
・ イベント広場として、広く開放できるように、必要最低限の整備を行い、既存の施設を自由に利活用できる様にソフト整備を行う。
・ 初期段階から、社会実験等により、火の山公園のことを広く周知させ、火の山公園の活用の仕方の可能性を探る。
・ セミパブリック空間において、グランピングや RV パーク、オートキャンプ場などのキャンプエリアとしての活用を図る。
・ 民間で事業化が検討されている「関門海峡メガジップライン」との連携を図る。

【特別な仕掛けイベント】　　【キッチンカー】　【ジップライン】

ライトアップ

光の幻想的な光景

アースナイトデイ

夜空の大切さを考える

手軽に提供

地上高く滑空

山頂公園の空間利用について

来訪者動線や空間構成上も比較的閉じた場所であることから、利用者を限定（有料）するイベントや公園内でプライベート空間を設けたグランピングなどセミパブリックな空間としての活用。

安全で快適な歩道空間の確保。

多くの来訪者が訪れる場所であり、眺望や自然を楽しむ、パブリック空間としての活用。

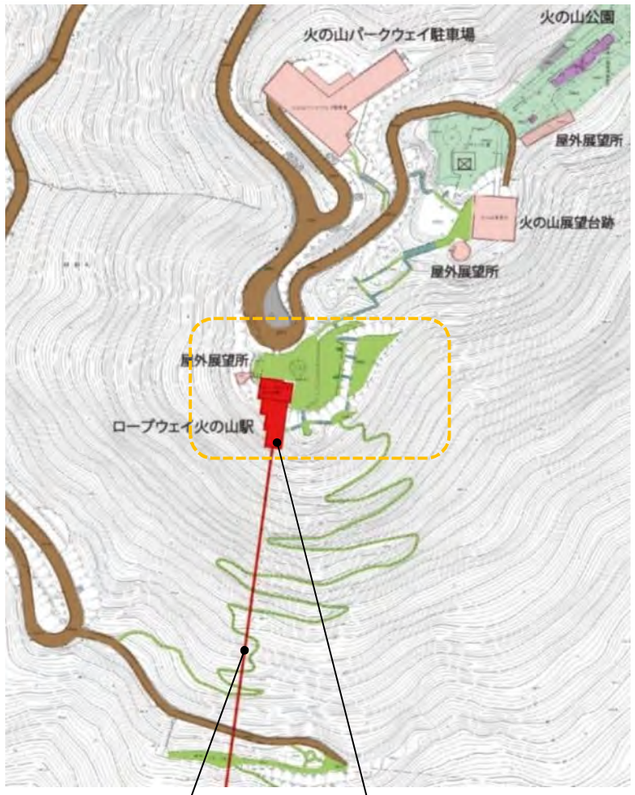
樹木の剪定・伐採を行い、眺望を確保。

貴重な平場であり、屋外ステージなどのイベント広場として活用。

移動中の散策や休憩を楽しめ、遊び心ある横になれるテラスや仲良くなるテラスなどコンセプチュアルな休憩スペース。

(2)ロープウェイ上駅

現状と課題



ロープウェイ上駅

・ロープウェイ開通当初より利用されている駅であるため、市民の愛着があるが、施設の老朽化が進む。
・眺望は最も良いが、休憩スペースに乏しい。

ロープウェイ

・ロープウェイの運行時間（17 時まで）が短く、季節運用されており、夜景を楽しむ時間帯の山頂へのアクセスが良くない。

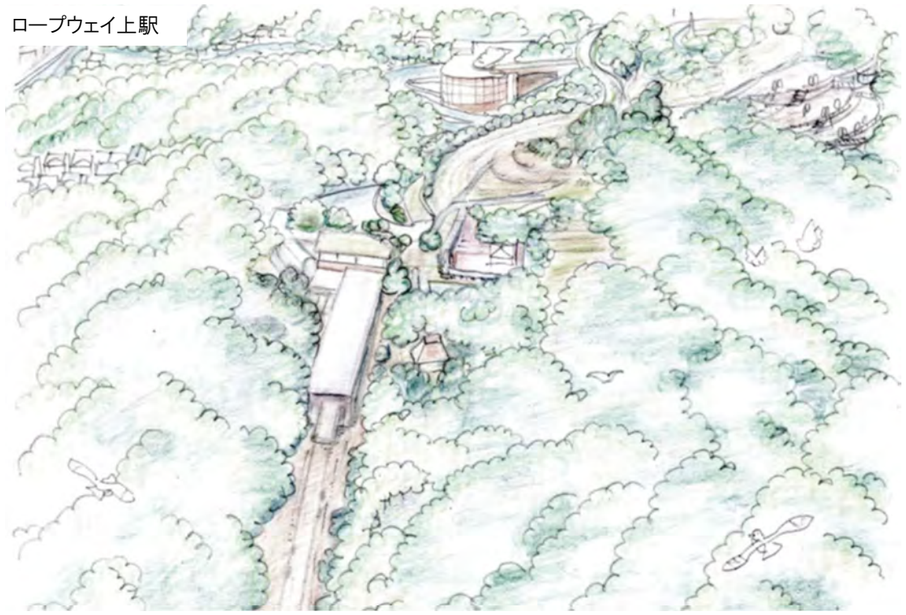
整備の方向性

【ゾーンコンセプト】
眺望を活かした上品なくつろぎ空間

- 瀬戸内海から日本海、下関市内を見渡す、眺望をゆっくりと堪能できる展望施設の整備を行う。
- 時間と共に変化する景色を、落着いた空間でゆっくりと過ごせる施設整備、飲食等の提供を行う。
- 日本夜景遺産の魅力を活かし、昼間とは異なる夜間を演出する。

ロープウェイ上駅からの眺望

ロープウェイ上駅



①絶景パノラマビューを活かした展望台設置

- 瀬戸内海から日本海まで見渡せる眺望を活用した施設を整備し、他の観光地では体験できない魅力づくりを図る。
- 高品質な場所、展望台により、差別化を図る。
- 火の山の価値（ブランド力）を高めるような火の山地区の再整備計画の肝となる場所として整備する。
- 天候に左右されずに、眺望を堪能できる展望スペースを確保する。

絶景を活かした展望台の設置

シースルーの展望台で景色を楽しむ

突き出した展望台から景色を一望

高さを活かしたアクティビティ

独創的な展望台の設置

平夢テラス（静岡県）

② 新たな癒しの空間として休憩および食事スペースを整備する

- 展望台内の施設の充実を図り、上質な癒しの空間として整備する。
- 山麓エリアのホテル等との連携を図り、新たな観光客の集客を図る。
- 昼夜の魅力ある眺望を活かし、20 席程度のゆとりある飲食スペースを整備する。

絶景と食とのコラボレーション

横山天空カフェテラス（三重県）

SORA terrace（長野県）

仕掛けとのコラボレーション

出典：国土交通省観光庁 HP

絶景ポイントのブランド化

清里テラス（山梨県）

(3)山麓公園

現状と課題

山麓公園
・緑地の活用ができていない。
・国道からアクセスがしにくい。

トルコチューリップ園
・11 月の種植えイベント時や春の開花時期など、目的のある限られた時期にだけ人が訪れている状況。

ロープウェイ壇の浦駅
・ロープウェイ開通当初より利用されている駅であるため、市民の愛着があるが、施設の老朽化が進む。

徒歩動線
・階段や急勾配な坂が多く、道幅が狭い。

整備の方向性

【ゾーンコンセプト】
自然の中でダイナミックに遊ぶ活動の空間

・ 山麓公園の自然や地形を活かし、大人も子供も一緒に遊べるアクティビティの整備を行う。

・ 広範囲な自然を活かし、キャンプや自然体験ができる場、近隣ホテル宿泊者や市民、観光客など、様々な人たちが交流する自然を活かした活動の場を整備する。

・ 今後、全国的に展開拡大が予想されるワーケーションなどの多様なライフスタイルに対応するため、山麓公園と周辺ホテルとの連携を図るとともに、屋外公園では、通信環境や簡易的なワークプレイスを設けるなど受け入れ環境を整備する。

山麓公園

① 自然の中で多世代が楽しめる活動の場
・ 山麓周辺に広がる森林を活用し、大人から子供まで、楽しめる場としてフィールドアスレチックを整備し、自然の中で遊び、健康づくりにもつなげる。
・ チューリップ園の規模拡大を図り、年間を通じて花が楽しめる場所とすることで、魅力向上を図る。
・ 施設の老朽化が進み利用されていない公園エリアでは海峡を望むロケーションを活かしたキャンプ･BBQフィールドとして活用を図る。

自然を楽しむアクティビティ

フォレストアドベンチャー

季節の花々が楽しめる空間

国営ひたち海浜公園

BBQテラス

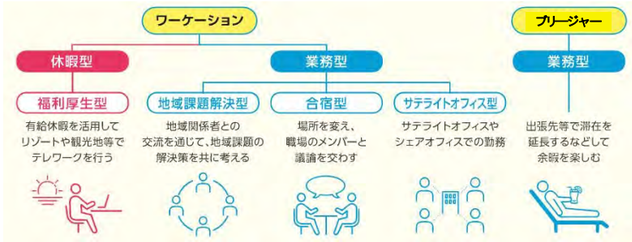
開放的なテラスで BBQ を楽しむ

山麓公園の空間利用について

斜面地の森林を活用したフィールドアスレチックやチューリップ園拡大による花々が楽しめる空間としての活用を想定。

関門海峡の迫力ある眺望を活かせず、老朽化が進む公園エリアは、樹木の剪定･伐採を行い、隣接するホテル等と連携し、BBQテラスなどとしての活用を想定。

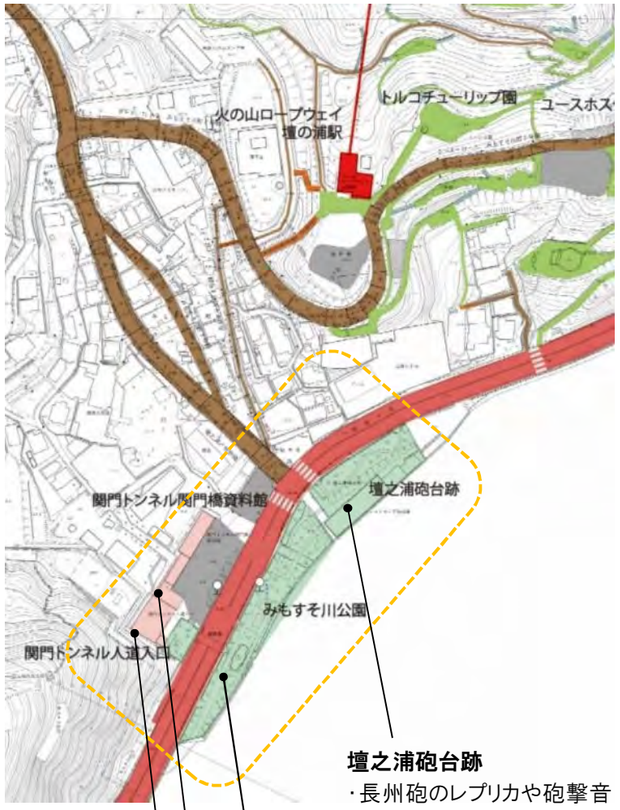
② 多様なライフスタイルに対応した取り組みの場
・ 官公庁をはじめ民間企業で導入が進められているワーケーション(仕事と休暇)やブリージャー(出張と休暇)など、仕事と観光の多様なスタイルを受け入れられる環境を整備する。
・ 山麓公園に立地する宿泊施設との連携を図り、関門海峡の迫力ある眺望を活かし、新たな旅先での過ごし方を受け入れられるように関係者と調整し、通信インフラやシェアオフィスなどの導入を図る。



新たな旅のスタイル　出典:国土交通省観光庁 HP

（4）関門トンネル人道入口周辺

現状と課題



壇之浦砲台跡
・長州砲のレプリカや砲撃音と煙の演出があるが歴史を知る素材がない。

みもすそ川公園
・関門海峡の潮の流れや船舶の迫力をダイナミックに感じられる。

関門プラザ
・関門トンネルや関門橋の展示がある
・火の山の歴史資源を学ぶ施設整備や機会がなく、観光地への情報発信が不十分。

関門トンネル人道入口
・人道トンネルを活用したソフト整備がなされていない。

整備の方向性

【ゾーンコンセプト】
遊び方を提案する情報提供の空間

- 火の山地区の玄関口として、自然や歴史を紹介するだけでなく、四季折々の遊び方を提案する場を整備する。
- 壇ノ浦の戦いや馬関戦争など歴史の舞台となった関門海峡の迫力を間近で感じられる場所で歴史体験エリアを整備する。
- 火の山地区のブランディングおよび観光戦略の企画発信、PR を行う観光案内機能を設ける。

関門トンネル人道入口

① 火の山情報交流拠点
- 国道沿いの立地を活かし、火の山の玄関口として情報発信拠点として施設を充実。
- 駐車場整備、多言語案内・Wi-Fi 整備など、国内旅行者や外国人観光客への対応強化。
- 下関市の歴史を知る・学ぶことができる展示・ガイドなどの学習機能を強化。
- 地元特産品の販売など、地元住民や観光客との交流場としても整える。
- シーニックバイウェイ（風波のクロスロード）を活かしたサイクルステーションを設置。

情報発信拠点施設

道の駅「雨晴」（富山県）

サイクルステーション

尾道（広島県）

② 歴史体験エリアとして位置づけ強化
- 壇ノ浦の戦いや馬関戦争など歴史舞台を疑似体験する空間整備やソフト整備を行う。
- AR技術を用いるなど、火の山地区の景観を感じながら歴史を体験することで、魅力向上を図る。

AR技術の活用

③ 観光戦略の企画、火の山地区ブランディング拠点
- 火の山観光戦略の企画発信、周辺観光地との周遊強化に向けた観光案内所等の設置。
- 年間を通じた火の山地区のコンテンツやイベント企画などの周知を行う。また、市内及び門司港地区など、周辺の主要観光地とのスタンプラリーなど連携強化を図る。
- 企業とタイアップを行い、民間参画による各種グッズの提供等により、特別な「場」としてのブランド力の向上を図る。

観光ツアー企画・発信

魅力の紹介や案内

観光周遊強化

着地型観光推進（観光庁 HP）

ブランディング展開

出典：経済産業省特許庁 HP

3. ゾーン間動線の再編整備の方向性

移動手段全体の現状課題と再編整備の基本的な考え方

自動車

関門トンネル人道入口～山頂公園
・国道 9 号から山頂公園までパークウェイを利用して通行可能。
・パークウェイの老朽化が進み、維持管理が必要。

ロープウェイ

ロープウェイ上駅～山頂公園
・山麓公園からロープウェイ上駅まで、ロープウェイで移動することが可能。
・公共交通との連携が十分でない。
・関門トンネル人道入口までのアクセスが悪い。
・ロープウェイが老朽化しているため、改修をする必要がある。

徒歩

ロープウェイ上駅～山頂公園
・勾配が急であり、高齢者が徒歩で歩くのはやや厳しい。
・山頂公園まで、園路が整備されており、自然を感じながら登ることができる。

山麓公園～ロープウェイ上駅
・山麓公園より登山道により行くことが可能であるが、維持管理が行き届いていない。

関門トンネル人道入口～山麓公園
・階段や段差が多く、勾配がある。
・整備が行き届いているとは言えない状況。

その他（広域エリア）
・北九州市門司港側より徒歩で来ることが可能。一部バリアフリー整備されていない。
・火の山には霊鷲山へ縦走できるルートが整備されている。

自転車

山頂公園・ロープウェイ上駅
・火の山パークウェイは、自動車専用道路で、自転車は通行禁止。
・現状では、自転車で山頂付近に行くことはできないため、駐輪場無し。

山麓公園
・自転車で行くことは可能だが、駐輪場は整備されていない。

関門トンネル人道入口
・関門人道トンネルは、自転車通行が可能。
・駐輪場は整備されていない。

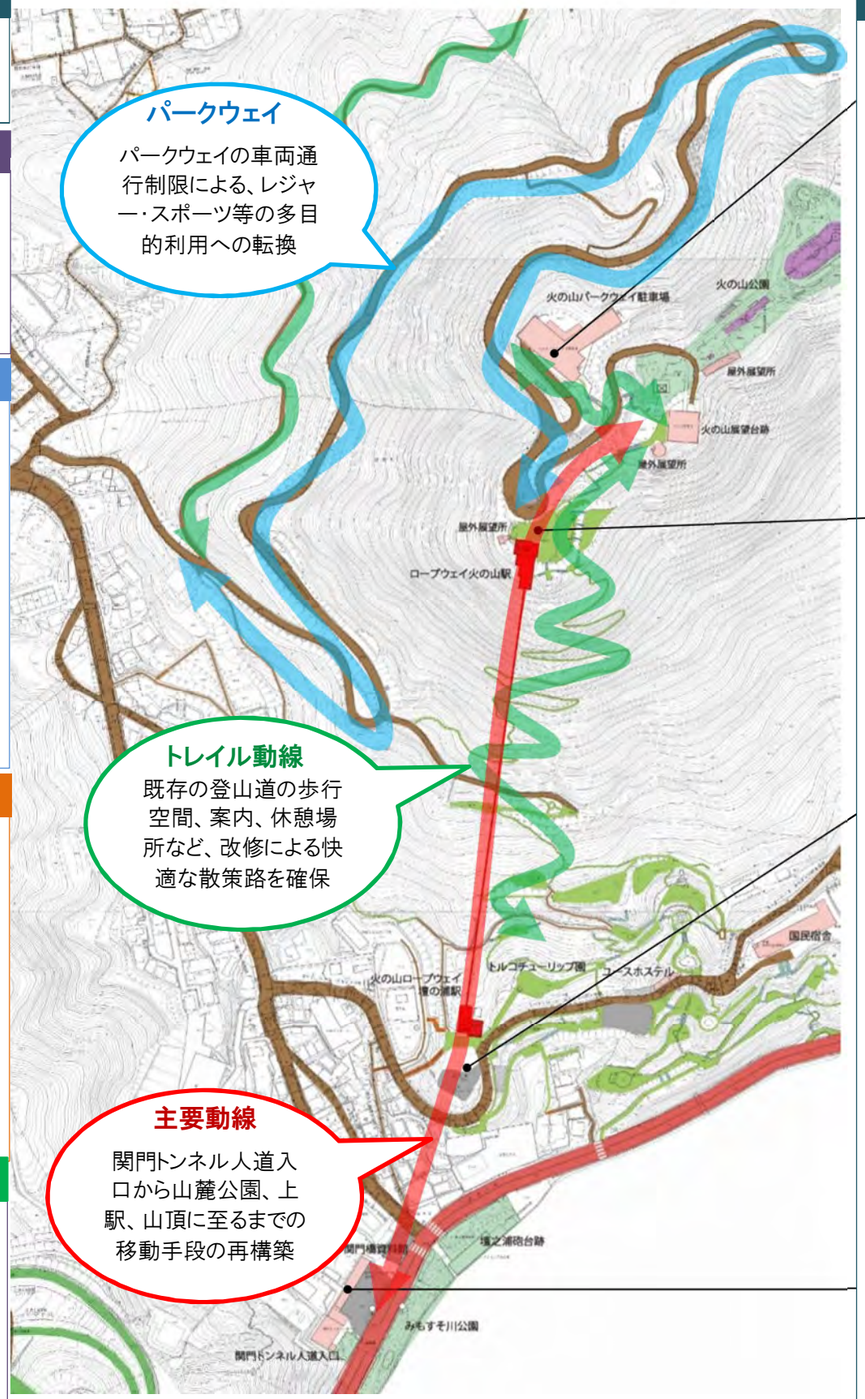
その他（広域エリア）
・火の山には霊鷲山へ縦走できる道が整備されている。

公共交通（バス）

山頂公園・ロープウェイ上駅
・公共交通を利用して山頂公園に行くことはできない

山麓公園
・火の山ロープウェイバス停があるが、1 時間に 1 本程度である。

関門トンネル人道入口
・下関駅等や長府などからのバスは充実しているが、関門トンネル人道入口から火の山へのアクセスが悪い。



駐車場

※（　）内は多目的駐車場の数

山頂公園
・山頂公園内には火の山パークウェイ駐車場が整備されているが、階段が多く、バリアフリー化されていない。障害者の方は、山頂公園内駐車場を利用しなければならない。
・パークウェイ駐車場は老朽化し、維持管理費用が増大することが懸念される。

〇現状の駐車台数

	現況
一般車	286(18)台※
バス	8 台

※(18)台のうち立駐(8)台、山頂(10)台

ロープウェイ上駅
・ロープウェイ上駅には、駐車場が 5 台程度であり、不足している状況。
・ロープウェイ利用者は、山頂に駐車する場合は、火の山パークウェイ駐車場を利用する必要がある。

〇現状の駐車台数

	現況
一般車	5(5)台
バス	—

山麓公園
・ロープウェイ下駅に駐車場があるが、トルコチュ-リップ園でのイベント等の際は駐車場が不足する現状である。

〇現状の駐車台数

	現況
一般車	38(2)台
バス	3 台

関門トンネル人道入口
・関門人道入口には、充実した駐車場が整備されている状態とはいえない。
・今後の活用内容を踏まえて駐車場の充実が求められる。

〇現状の駐車台数

	現況
一般車	36(1)台
バス	1 台

各ゾーン別コンセプトをふまえた上で、【主要動線】・【トレイル動線】・【パークウェイ】の移動手段の再構築を図り、移動手段の充実を図る。

スロープカー等での主要動線の導入パターン

導入パターン①：
山頂公園から関門トンネル人道入口まで
スロープカー等を整備し、円滑な移動を提供する

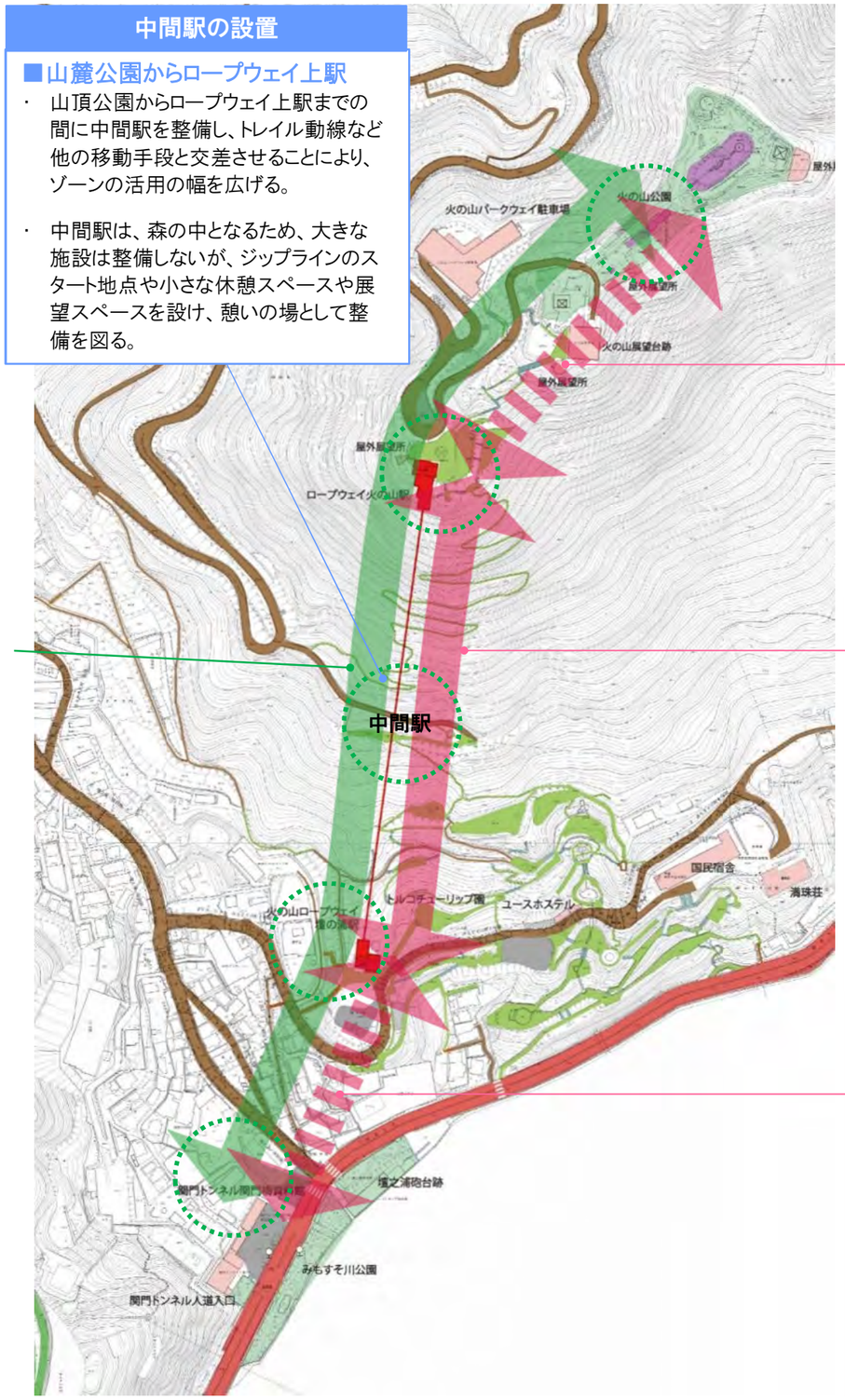
スロープカー等の一つの移動手段の提供

- 山頂公園から関門トンネル人道入口までスロープカー等での一つの移動手段を整備し、円滑な移動を提供する
- 各ゾーンのコンセプトに合わせ、途中駅を設けるなどの検討を行い、より火の山を活用できる移動手段を提供する。
- 現状の軌道を活用することで、整備に係る期間や関係機関との協議を短縮することが可能
- 新たな移動手段や各ゾーンごとの利用者に合わせた車両仕様を検討し、火の山全体の活用に展開させる。

中間駅の設置

■山麓公園からロープウェイ上駅

- 山頂公園からロープウェイ上駅までの間に中間駅を整備し、トレイル動線など他の移動手段と交差させることにより、ゾーンの活用の幅を広げる。
- 中間駅は、森の中となるため、大きな施設は整備しないが、ジップラインのスタート地点や小さな休憩スペースや展望スペースを設け、憩いの場として整備を図る。



導入パターン②：
複数の移動手段導入により観光客を呼び込む

■火の山ロープウェイ上駅～山頂公園

【新交通システムの導入】

- 新しい新交通システムを導入によりワクワク感を演出

○グリーンスローモビリティ

- 時速 20km 未満で公道を走る 4 人乗り以上の電動パブリックモビリティー

○三方向指示案内式位置エネルギー利用交通システム

- 車両側には駆動モーターやブレーキを持たず、車両の動きを全て地上側から操作する地上一次型交通システム

■山麓公園～火の山ロープウェイ上駅

スロープカーの導入

- 途中駅を設けるなどの検討が必要
- 現状の軌道を活用することで、整備に係る期間や関係機関との協議を短縮することが可能

■関門トンネル人道入口～山麓公園

ELV+歩道橋の設置

- 限られた用地内での構造物の設置検討が必要
- ELV 及び歩道橋についてはシンボル・モニュメント性の高い意匠性を高め、火の山地区の玄関口のシンボルの役割を担わせる。

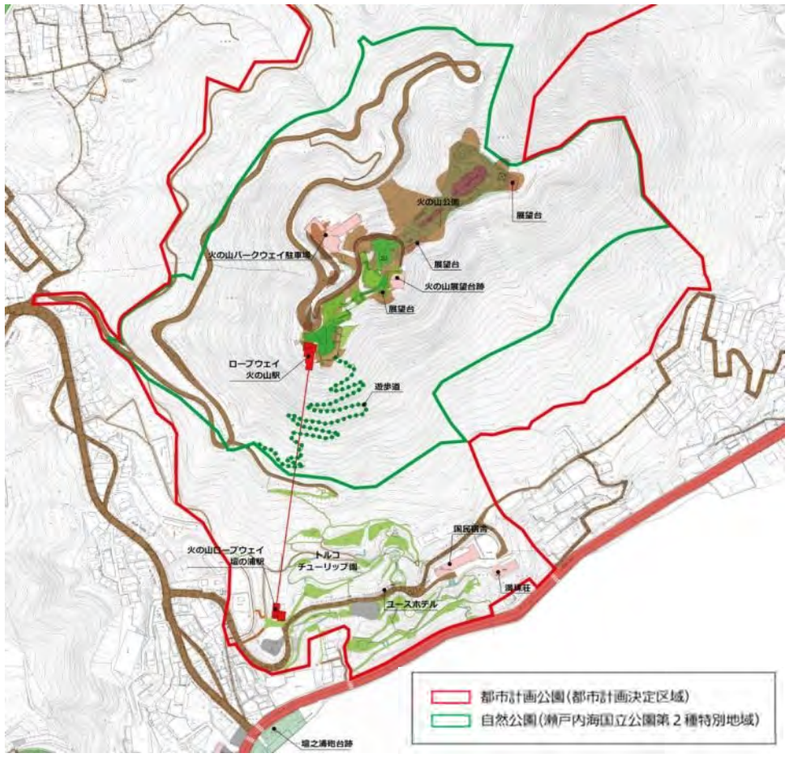
※意匠性の高い ELV イメージ参考図
（写真提供：八馬 智）

Ⅲ. 事業手法及び管理運営手法の検討

1. 火の山地区の管理区域について

火の山地区の4つのゾーンをふまえ、区域指定状況や主な所有者を整理する。

ゾーン	区域指定	主な関係法令	主な所有
①山頂公園	自然公園区域(旧展望台付近、上駅～山頂園路)	自然公園法	国
	一部都市公園事業区域(駐車場、砲台跡、遊具)	都市公園法	市
②ロープウェイ上駅	自然公園区域	自然公園法	国
③山麓公園	都市公園区域	都市公園法	市
④関門トンネル人道入口	市街化区域(第一種住居地域)	都市計画法	NEXCO、民間



2. 近年の都市公園を取り巻く潮流

近年では、社会の成熟化、市民の価値観の多様化、都市インフラストックの一定の蓄積等をふまえ、都市公園の整備・運営にあたっては「新たなステージ」への移行が求められており、平成 29 年には「都市公園法」が改正されている。

3. 火の山地区の事業手法及び管理運営手法

我が国では、平成 11 年 7 月に制定された「PFI法」以降、官民連携(PPP)事業の推進は、関係府省庁で取り組みが進められている。現在、PPPによる事業手法には様々な手法が展開されており、事業として想定される規模や性格、民間事業者の意向などを勘案し、事業手法の選定を行うことが重要となる。

本市では、そうした国の動きのほか、近年の厳しい財政状況や公共施設の適正配置をふまえて「下関市PFI活用指針(第 3 版):令和 2 年 4 月」を策定しており、今後の公共施設整備等においては、複合化や集約化等も含めた官民連携の推進を掲げている。

4. 事業具体化に向けた社会実験の推進

火の山地区観光施設再編整備基本構想策定以降、官民連携を視野に入れた事業手法を具体化していく中で、地域関係者の参画促進や市民・観光客への火の山地区の再認識を目的に社会実験を実施し、切れ目のない段階的な事業ステップの展開を目指す。

【社会実験の目的～火の山地区観光施設再編整備の第一歩として社会実験を実施～】

【現状】市民・観光客の低い認知度、来訪者減少、施設老朽化、維持管理の逼迫

↓

【将来】賑わいや憩いの場とし広く周知、市内の主要観光スポット、持続可能な体制

【社会実験を企画・実施する上でのポイント】

① イベント実施が主目的ではなく、将来の事業化への課題把握を主眼に置いた取り組み
- 社会実験は、火の山地区再編整備推進への課題・リスク把握することを主眼として、将来的な事業主体(プレイヤー)探し、人材・組織づくりを意識した取り組みとする。

② 火の山地区の魅力に共感を持ち、将来は事業協力が期待できる人材・組織の参加
- 火の山地区の各ゾーンの魅力に共感を持って、将来的には、積極的かつ主体的に事業化へ参加・協力が期待できる個人や組織の参加を促す。

③ 火の山地区の個々のゾーンでの事業展開、全体的なコーディネーターの両方向の視点
- 火の山地区の各ゾーンを対象とした個々の事業のほか、火の山地区全体のコーディネートを担える主体の参加を意識する。

④ 全国的に取り組む先行企業と地元人材・組織・団体とのマッチング
- 火の山地区全体での魅力向上、持続可能な運営に向けて、先行的なノウハウを持つ全国展開企業と、市内の人材・組織・団体とのマッチングにより、社会実験を実施。

⑤ 段階的なステップアップから事業手法決定、事業実施までの継続的な取り組み
- 社会実験は一過性のイベント的取り組みではなく、将来的な火の山地区再編整備及びその後の持続可能な事業展開につなぐ、段階的なステップアップを目指す。

⑥ 各年度社会実験における、PDCA サイクル及び再編整備実施に至る PDCA サイクル
- 各年度に実施する社会実験は、事業計画立案時に目的や評価指標を定め、実施結果を検証するとともに、その翌年に向けた事業への展開を図り、火の山地区再編整備事業の実現に至る PDCA サイクルの評価を実施する。

社会実験の段階的な展開イメージを以下に示す。また、事業内容や規模に応じて、国等の財源面や制度面での各種支援制度の活用も視野に展開を図っていく。

【社会実験を通じた段階的な展開イメージ】

令和2年度　～民間事業者等とのワークショップによる意見交換～(実施済み)

↓

ステップ 1　～多様な主体参加による火の山での期間限定フィールド実験～

↓

ステップ 2　～将来的な再編整備におけるビジネスモデルを意識した実験～

↓

ステップ 3　～事業手法の決定、事業者選定、具体的な事業推進～

⇒ 事業内容・事業手法の検討

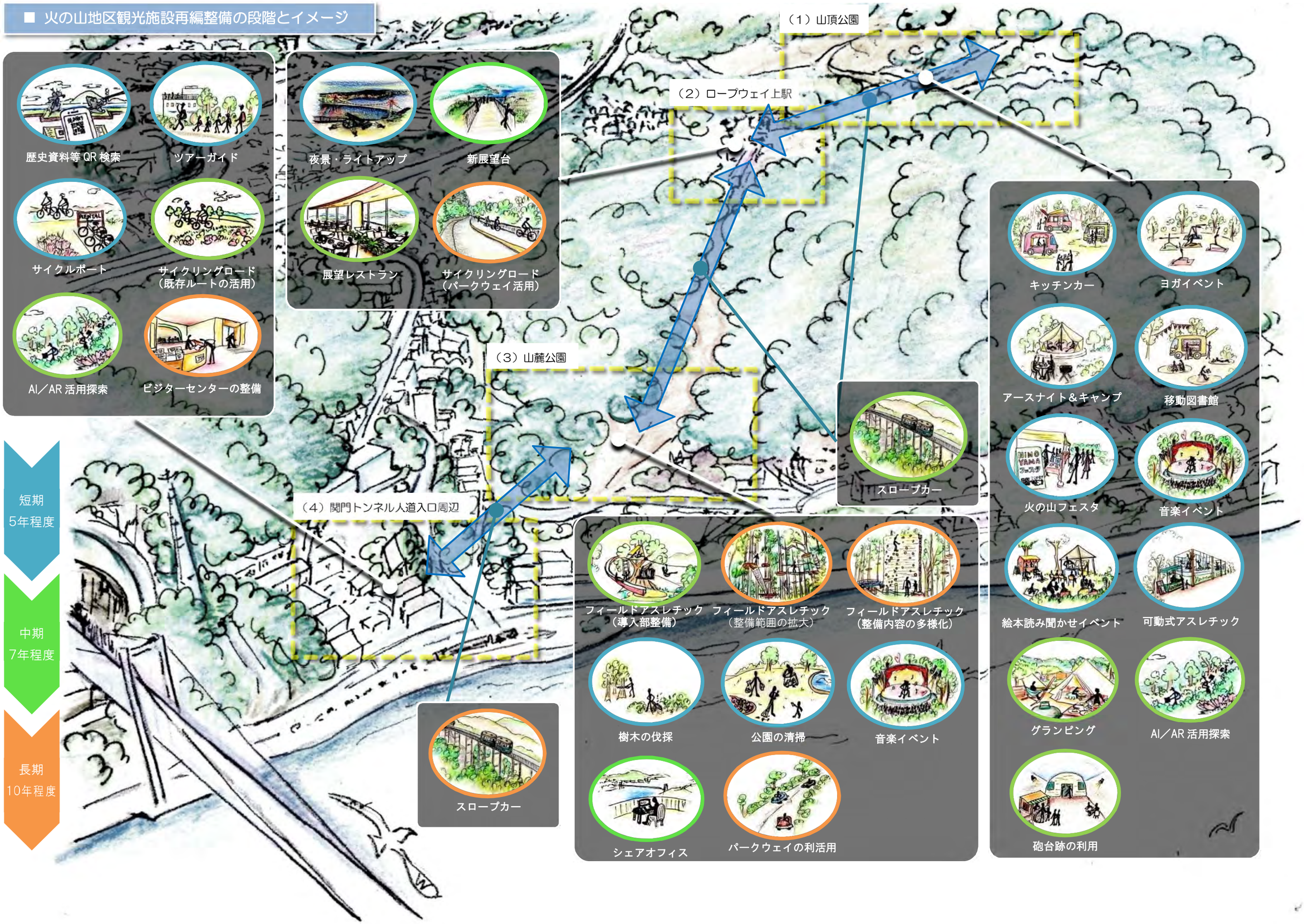
Ⅳ. 基本構想の実現に向けて

【火の山地区観光施設再編整備ロードマップ（主要項目）】

エリア戦略		短期（５年程度）	中期（７年程度）	長期（１０年程度）
		【火の山地区の認知度向上】	【火の山地区の魅力向上】	【火の山地区のブランド力向上】
コンセプト		再生誕　火の山　～多彩な魅力を発信・体験する場～		
【全体整備】				
人道口から山頂まで快適な移動とともに楽しさを感じられる移動手段の再構築	①主要動線	既存ロープウェイ新移動手段設計（調査・設計）	新移動手段の段階整備	新移動手段とソフト事業との連携による集客
	②トレイル動線	ハイキングルートの検討（見直し）と整備	トレイルルートの検討	トレイル動線の運用開始
	③パークウェイ	パークウェイ（駐車場・道路）の利活用検討	パークウェイ（駐車場・道路）の改修	パークウェイの利活用の本格化
	④駐車場（新設）	各駐車場の設計	山麓公園・関門トンネル人道入口駐車場整備	供用開始
	⑤広域連携	関係者協議	サイクルポート／公共交通の見直し	運用開始
【山頂公園】		～山頂公園の認知度向上～	～山頂公園の魅力向上～	～山頂公園の安定的な集客力の向上～
自然や歴史を生かした年中楽しめるイベント空間	①市民活動の場としての活用	キッチンカー等社会実験/関係者協議	暫定利用から日常利用に順次移行	市民が主体となった市民活動の場へ展開
	②定期的なイベント等の展開の場としての活用	イベント社会実験/利用空間の整備/関係者協議	イベントの継続実施／ライトアップの実施	暫定利用から定期的イベントへ移行
	③砲台跡地の活用	樹木の伐採（間伐）／砲台跡の改修／関係者協議	火ノ山砲台跡の利活用	暫定利用から日常利用に
	④全体の空間整備	子供広場改修＆上記①～③に連携した広場改修	市民への開放	
【ロープウェイ上駅】		～絶景の周知・認知度向上～	～施設整備・情報発信～	～交流促進・ブランド力向上～
眺望を活かした上品なくつろぎ空間	①絶景パノラマビューを生かした展望台設置	展望施設の調査・設計（新移動手段と連携）	展望施設の整備／仮展望台の整備	民間企業と官民連携による地域のブランド力向上
	②新たな癒しの空間への整備	WS の実施（民間企業参画促進）／関係者協議	展望施設内に入る民間企業の選定	民間企業と官民連携による地域のブランド力向上
【山麓公園】		～山麓公園の認知度向上～	～山麓公園の魅力向上～	～山麓公園の安定的な集客力の向上～
自然の中でダイナミックに遊ぶ活動の空間	①自然の中で多世代が楽しめる活動の場	社会実験／樹木の伐採（間伐）／関係者協議	遊具の整備／チューリップ園との連携／関係者協議	フィールドアスレチック整備／イベント実施
	②新たなライフスタイルに対応した取組の場	宿泊施設等との連携検討	宿泊施設とのツアー等の提示	宿泊施設との連携確立と発展
【関門トンネル人道入口】		～火の山地区の認知度向上～	～火の山地区の魅力・集客力の向上～	～火の山地区の観光客の増加～
遊び方を提案する情報提供の空間	①火の山情報交流拠点の整備	サイクルポートの社会実験／関係者協議	ビジターセンターの設計／整備／飲食社会実験	供用開始
	②歴史体験エリアとして位置づけ強化	ビジュアルコンテンツの展開／ツアーガイド整備	火の山全体での観光活用（イベント等）の展開	複合施設との連携による展開と発展

【火の山地区観光施設再編整備メニュー一覧（案）】

エリア	具体的な行動・事業の一例		実現へのポイント（考察）
山頂公園	新しい「場」の整備	・あおぞら図書館	・実施日が天候に左右される、不定期の実施、書架・書籍の準備（移動図書館活用）
		・パークアート（市民アート展示）	・屋外展示作品の「場」、アートワークショップ等との開催も考えられる（市民文化活動）
		・砲台跡を利用したカフェ、展示会等	・歴史遺構の活用、清掃、一部補修は必要であるが全天候空間が容易に確保・利用可能
		・ライトアップ	・夜も楽しめる「場」として歴史遺構等を日常的にライトアップ
		・青空マルシェ（朝市など）	・市民向け（観光客も来訪）に様々な物産を扱う現代の「市」が開かれる「場」として利用
		・ヨガ教室（健康増進）	・ヨガに限らず様々な「健康増進」を行う「場」として利用
		・その他市民が利用しやすい柔軟な環境整備	・市民が火の山地区を再認知、愛着を持ってもらうために「場」を柔軟に提供する
		・インスタスポット整備	・関門海峡の眺望に特化、関門海峡の眺望とコラボするインスタスポットの整備
		・キャンプ・グランピング	・「火の山で一夜過ごす」特別な体験が出来る「場」の提供（洗い場など施設整備が必要）
		・ツアーとの連携	・エージェントが興味を持つ、魅力的な「場」の提供が必要。火の山地区全体が対象
	イベントの一例	・イベント活用の社会実験	・観光施設再整備を行う各種知見を得るために実施、再整備の PR にも活用
		・イベントと合わせた飲食の提供（キッチンカー等）	・キッチンカー出店のルールづくりが必要（登録ルールの決定）
		・ジャズ祭等（ex.ストリートパフォーマーの祭典）	・ジャズに限らず、山頂公園の各所で演奏、演者の募集・登録制度の整備
		・火の山まつり（継続的なイベント実施）	・春夏秋冬のシーズンごとに集客イベント（「光」アートなど）を実施
		・個人・団体へのイベント活動の「場」を提供	・日時を区切り限られたゾーン貸出（利用者申請と内容審査（反社等排除）が必須）
		・天体観測（星空観測会）	・山頂から季節ごとの天体ショーを観測するイベント開催
		・夜景探偵団（ツアー、大人のイベント）	・関門海峡の夜景を楽しむツアー（ガイドの育成が必要）
	施設管理・運営	・清掃活動	・「グリーンバード」のような自主組織（NPO 等）を想定（火の山地区全体も視野）
ロープウェイ上駅	新しい「場」の整備	・眺望を楽しむ新展望空間での高品質な飲食の提供	・眺望を活かした、上質なくつろぎ空間を実現するには必須（短期はキッチンカーの活用も想定）
		・旧ロープウェイの展示	・ロープウェイが移動手段としての役割を終える場合に検討
	イベント	・駅イベントを開催（バックヤード見学会）	・ロープウェイが移動手段として存続する場合に実施、駅施設を多角的に活用
		・新展望台でのイベント開催	・新駅舎に設置する展望台を有効に活用する
	既存施設の更新	・移動手段の更新	・移動手段更新の方針が施設再編整備の手順・工程をコントロールする要因となる
		・更新に伴う工事期間の仮設展望台の設置	・火の山地区で最高の眺望が得られる「場」であることを更新工事期間もアピール
	情報発信	・移動手段の更新・新展望台の周知	・眺望を活かした、上質なくつろぎ空間の認知・ブランド力アップの肝
		・更新後の施設内のスペースの誘致企業募集	・眺望を活かした、上質なくつろぎ空間を実現するための肝
山麓公園	新施設・体制整備	・アドベンチャー部分開業	・子供向けのアスレチック施設を整備、集客・運営・管理に係るテスト運用
		・トルコチューリップ園との一体的整備	・来園者の回遊・散策コースへの組み込み、案内
		・フィールドアスレチックの整備	・自然の中でダイナミックに遊ぶ、活動の場の整備
		・ユースホステル等との連携	・宿泊客への案内、日常管理（見回り等）への協力依頼
	イベント	・アドベンチャー利用の社会実験	・スラックライン、ハンモック等簡易な設備を準備、キャンプ利用を想定
	既存施設の更新	・遊具の更新	・利用の危険を伴う施設の撤去・補修。周辺住民が利用したい公園にすることが目的
		・老朽化施設の整備	・同上
	施設管理・運営	・ボランティアによる日常管理に向けた組織作り	・地域活動を担う地元住民が主体の組織化の推進
		・公園の掃除	・地域活動の一環として市民に愛着を持ってもらう工夫（公園サポーター、日常管理）
		・樹木の伐採	・公園の魅力向上（現在、公園内に光が差し込まず、海側への眺望も遮断）
関門トンネル人道入口	新施設・体制整備	・サイクルポートの設置	・自転車利用者向けに様々なサービスを提供（サイクルツーリズムへの対応）
		・ビジターセンターの整備	・各種観光案内で紹介、現在も観光客が訪れる場のポテンシャルを周知に活用
		・スロープカー駅とビジターセンター、カフェスペース等の機能を融合した複合施設の整備	・移動手段の整備と連携、運営体制の検討が必要 ・火の山地区の玄関・コア施設（拠点機能を付与）、観光案内所
		・レンタサイクルの連携	・既存のレンタサイクルの拠点を整備（海峡サイクリング）
		・ネイチャー体験の受付	・新施設が整備された場合の活動の一例、新施設の運営団体が主体で実施
	新しい「場」の整備	・キッチンカー（カフェ等）での飲食提供	・キッチンカー出店のルールづくりが必要（登録ルールの決定）
	情報発信	・ビジュアルコンテンツの展開	・観光客が所有するモバイル機器を利用、基本的にソフト整備で実現可能
		・火の山全体のイベント周知	・みもすそ川公園及び関門人道 TN 入口施設等での周知から着手

主なメニューのイメージ

■ 火の山地区観光施設再編整備の段階とイメージ